

冷戦下の文学 ——占領期ウィーンとフランス

前 田 佳 一

本講演では、冷戦初期の占領期オーストリア文学（1945-1955）の基本的状況を素描しつつ、当時のウィーンにおいてフランス文学、特にシュルレアリスムがいかなる形で受容されていたのか、また、それに対していかなる応答がウィーンの文学界においてなされていたのか、ということを経験した。以下が概要である。

占領期オーストリア文学は1938年（ナチス・ドイツとの合邦）以前のオーストリア文化を継続しようとする保守的傾向と、前世代の文化に不信感を持つ若年世代との間の緊張関係によって特徴づけられる。だがそれと同時にソヴィエト、アメリカ、イギリス、フランスによる分割統治という政治的状况において雑誌、新聞、ラジオ等のマスメディアが各国の意向を反映するという中で個々の作家たちもある種の文化的代理戦争に巻き込まれていた。それゆえ、この時期のオーストリア文学を研究するにあたっては、個別の作家研究の枠を越えた社会的・政治的状况を踏まえた上での考察が不可欠である。

第二次世界大戦終戦直後に刊行され、マーシャル・プラン後の1948-49年頃には廃刊となった文学・芸術雑誌は、その後の戦後オーストリア文学の潮流の前提をなすものであり、とりわけ興味深い。この時期の主な雑誌にはソヴィエト占領軍によって出版を許可され、若手作家の作品を多く収録したことで知られる『プラン』(PLAN; 計画/地図) やオーストリア教育庁による助成を受け、カトリック系オーストリア文化の復興を旨とした保守系雑誌『トゥルム』(Der Turm; 塔) 等があるが、フランス関連のものでは、フランス広報局によって発行された『オイロペーイシェ・ルントシャウ』(Europäische Rundschau; ヨーロッパ通信)、インスブルックのフランス占領軍による助成を受けた『ヴォルト・ウント・タート』(Wort und Tat; 言葉と行動) がある。

『プラーン』や『ヴォルト・ウント・タート』でブルトンやアラゴン等のシュルレアリスム作家やサルトル、カミュ等の同時代の作家たちの翻訳が掲載される一方で、理念的には各誌のフランス文学受容はカトリック的あるいは古典主義的な価値観に裏打ちされた保守的なものであった。その背景には当時のウィーンの読者公衆におけるシュルレアリスムに対する拒否反応があった。これはナチス時代に貼られた「退廃芸術」というレッテルに基づくシュルレアリスム観が戦後においても残存していたためである。そうした中であって、シュルレアリスムの作風のドイツ出身の画家エドガー・ジュネ (Edgar Jené, 1904-1984) は、『オイロペーイシェ・ルントシャウ』誌上において、第二次世界大戦や核兵器のような破局を人類が経験することになったのは理性への信奉が行きすぎたために人間に本来的に備わっている暗い衝動や本能、暴力性が不適切な形で抑圧され、噴出したせいであるとして、シュルレアリスムを(手法面においてではなく)倫理的側面から擁護した。1950年代以降、何らかの形でシュルレアリスム的なものに影響を受けた雑誌や若手作家たちの作品がウィーンやグラーツで盛んに出版されることになるが、1940年代後半の時点においてジュネのこうした立場はオーストリアの文学界においてマイノリティにとどまった。

こうした状況下において、ウィーンの外部からシュルレアリスムの詩作をウィーンに持ち込み、そして短期間でこの地を去ることになったのがルーマニア出身の詩人パウル・ツェラーン (Paul Celan, 1920-1970) である。ツェラーンはブカレストのシュルレアリストのサークルと交流した後、1947年にウィーンにやってきて詩集『骨壺からの砂』を発表後、1948年にパリへと移住する。ツェラーンはこの時期エドガー・ジュネとも交流していた。二人の関係は後に途絶えることになり、ツェラーンは後年シュルレアリスム自体からも距離をとるようになるが、彼のこの短いウィーン時代は、当地の文学界において確かな爪痕を残した。『プラーン』に掲載され、詩集『骨壺からの砂』では「黒い雪片」というタイトルで収録された詩「雪が降ってきた」における死者との交歓のテーマや、「雪」と「布」のモチーフにみられる詩論的契機はツェラーンのみならず戦後のドイツ語圏文学全体において重要な主題となった「アウシュヴィッツ以後」の詩作の先駆けとなるものであるが、こうした作風はまだ保守的傾向の色濃い1940年代後半のウィーンにおいては異質なものであった。ツェラーンに象徴される(当時であっては)新しい詩作の形と、過去を志向する戦後ウィーンの文学界との決定的なすれ違い

が、この詩において一つの現れをみたと言えよう。